

原爆文学研究会報

第四二号

原爆文学研究会 二〇一三年十一月

〈放射能汚染〉〈復興〉〈東京五輪〉 二〇二〇年東京オリンピック開催が決まった。I O C 総会の席上、五輪招致の懸念材料とされた東京電力福島第一原子力発電所の放射能汚染水問題について、安倍首相は「状況はコントロールされている。私たちは決して東京にダメージを与えない」という主旨の発言をしたという。しかしその後東電幹部も認めたように、状況はコントロールなどできていないし、「港湾内云々」という言い逃れに対しては、「福島ならダメージを与えてもよいのか」というツツコミを入れずにはいられない。福島をはじめとする被災地支援対策をおざなりにしたまま、東京五輪が「東日本大震災からの復興の重要な節目になる。日本が復興を成し遂げた姿を世界に発信したい」（根本復興相）とは笑止というほかない。

ところで、〈放射能汚染〉〈復興〉〈東京五輪〉という“三題噺”で思いつくのは『モスラ』（東宝、一九六一年）である。紙幅の都合上論証抜きに言うほかないが、『モスラ』の物語内容は、「戦争の記憶」（原水爆と〈放射能汚染〉の恐怖）を忘却し、というよりもむしろその都合の良い部分を流用し、〈復興〉、そして成長（その集大成としての一九六四年〈東京五輪〉開催は一九五九年に決まっている）へとシフト転換する「戦後の」な想像力の中にどっぷりと浸かったものになっている。そこでは、「戦争の記憶」―「戦後日本」にとつての不安や疾しさの原因が一瞬呼び出されるものの、しかしそれはすぐに自然のエキゾチズムや近未来のオプチミスティックな表象に置き換えられて無害化される（たとえば、東京の真ん中で使用される「原子熱線砲」は、「広島・長崎・ビキニ」の記憶よりもむしろ『鉄腕アトム』的な想像力に連なる）。そして、ブルドーザーを

思わせるモスラの進撃による東京都心（渋谷周辺）の密集地破壊は、〈東京五輪〉を控えた都市再開発と重なってしまう皮肉を帰結するのである。思えば、〈復興〉とナシヨナリズムを基調で語りながら、しかしそうした物語に回収されない他者性を垣間見せてしまう『ゴジラ』（東宝、一九五四年）の「不気味さ」が『モスラ』には欠けている。今後七年間は、『モスラ』的な想像力の枠内で〈放射能汚染〉〈復興〉〈東京五輪〉という“三題噺”が繰り返されるのかもしれないが、だとすれば（だからこそ）、そのような語りがかき消そうとするものの叫びを、我々は耳に焼き付ける必要がある。

（深津謙一郎）

第四二回 原爆文学研究会報告

二〇一三年八月三十一日（土）、九月一日（日）、神戸市外国語大学で第四二回研究会を開催しました。

八月三十一日の繁沢敦子氏の研究発表に対しては、「執筆についてアメリカ政府などから圧力がかかったことはないのか」、「ハーシーが取材対象とどのように向き合い、そのことを発表者はどのように考えるか」、「ロスの書き込みによって「真相」に近づいたといえるのか」、「ロスはこの作品をどのようなものにしたのか」と考えてハーシーにコメントしていたのか、「原稿制作が二ヶ月で可能だったのは、編集者によるどのようなバックアップがあったからなのか」等の質疑がありました。

中谷いづみ氏の研究発表に対しては、「長田新が序文で表明する立場



は、誰に宛てたメッセージなのか、「もう少し前後の時間幅をとったとき、平和運動のイデオロギー状況から見てどのような問題があるか」、「この時期、朝鮮戦争の問題は外せないが、雑誌「平和」や、日本文化人会議等と重ねて見ていけば五〇年代の知識人のオピニオン状況がまた違って見えてくるのではないか」、「受容については映画化における政治的な問題を考えることもひとつの方法ではないか」等の質疑がありました。

中野和典氏の研究発表に対しては、「二人への悼み・怒りが、死神の擬人化によって質的な転換が生じているのか」、「被害者／加害者、被爆者／非被爆者の揺らぎと、当事者／非当事者の揺らぎの重なり具合はどのようなものか」、「不謹慎と怒りについて問題にしているが、作者は本当に怒らせるために描いているのか」、「高橋源一郎の言語戦略はもつと多層的ではないか」等の質疑がありました。

九月一日は、午前中に「ヒバクシャを「語る」―核と植民地主義―と題しワークショップを開催しました。全体討議では、竹峰誠一郎氏の発表について「マーシャル諸島の住民の間でヒバクシャ差別があるのか」、「断ち切られた自分たちの未来を住民がどのように語っている

のか、いないのか」、「住民自身が声を集積するような証言活動があるのか」、楠田剛士氏の発表について「カラスというイメージから脱却するような、朝鮮人が日本人に抵抗する場面が描かれているかどうか」、「『軍艦島』は核と植民地主義というテーマをどのように問題化しているのか、あるいはし損なっているのか」、「鳥が目をついばむ場面は「アメリカ農夫の手紙」にも見られ、人間を人間でないものにする場面として有名である」、また二つの発表について「共通するのは、土地との一体感が失われていく問題だと思う」、「今回は「語る」というテーマだが、「語らない」ということにも共通点があるのではないか」等の意見・質問がありました。

午後からは、記録映像作家・岡村淳氏のドキュメンタリー「消えた炭鉱職者を追って 序章」と「リオ フクシマ」の二本を上映し、次に岡村淳氏、高野吾朗氏、川口隆行氏による鼎談を行いました。鼎談では、「フクシマの語り方についてのアイロニーが描かれている」、「語り手自身が出てくるドキュメンタリーは日本のマスメディアのあり方に相対する語り方ではないか」、「今日観た二つの映画は共通して、自分が受けた被害を他者に伝えることの難しさを考えさせる」（高野）、「同じエピソードに対しても多様な受け取り方がなされている」、「シーンが長いという感想があるが、長いということは悪いことなのか」、「聞き取りにくさも含めた臨場感であり、分かりやすい映画を作っているつもりはない」（岡村）、「コミュニケーションの誤解や理解のプロセスをとらえた映画ではないか」（川口）等の話題があり、フロアーからは「日本人が国際的な場でどのように振舞うかをよく表している」、「途中のハーモニカの場面はもともとどのような文脈であり、なぜ最後にもう一度音が流されるのか」等の感想や質問がありました。

◇ 研究発表1

ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』

形成過程の考察―編集者の役割を中心に―

繁沢 敦子

一九四六年八月末に『ニュー Yorker』誌に掲載され、米国内外で大きな反響を引き起こしたジョン・ハーシーの『ヒロシマ』。その出版から三分の二世紀を経てなお、絶版することなく読み継がれ、一九九九年には二十世紀で最も影響力のあった米国のジャーナリズム作品のトップに選ばれた。ハーシーは一部の初版本の冒頭に同誌の編集者に対する謝辞を付しているが、『ヒロシマ』誕生における編集者の役割はどのようなものだったのか。

ハーシーは「作品がすべてを語っている」として、生前自ら作品について語ることは少なかった。文学を一つの芸術と捉える場合、完成品こそすべてであつて、その成り立ちを議論することに何の意味があるのかという考えもあろう。しかし、原爆という兵器の持つ威力や特殊性、そして戦時中の米国では原爆開発の秘密が自主検閲で守られていた事実や、戦後も原爆をめぐる言説空間が米政府の秘密保持政策によつて操作されてきた歴史を考慮すると、『ヒロシマ』という作品の形成過程を検証することも一つの研究に値することのように思われる。

報告者は『ヒロシマ』が米国で常々語られてきたように「原爆の影響を余さず描いている」のかを検証する論稿を前年に発表している（『広島国際研究』第十八号）が、雑誌の場合においては作家だけでなく、編集者の影響も検討されなければならないと感じてきた。特に『ニュー Yorker』の創刊者で編集者だったハロルド・ロスは、想像できるほどに記述内容を自分が理解できるまで作者に問い続ける編集姿勢で知られてい

た。

本報告では、『ヒロシマ』の手書き初稿とロスがそれに対して抱いた疑問や指摘を列記した質問表を対比し、最終的に掲載されるまでのような修正や加筆が行われたかを分析した。いずれの一次史料も全体分は揃っていないため、分析に限界はあったが、編集者がハーシーのルポに求めた内容の傾向は明らかに変わったように思う。報告に対しては多くの貴重な意見を頂いた。それらを踏まえながら、今後もこの問題を追っていきたいと考えている。

◇ 研究発表2

「原爆の子」を読む

中谷 いずみ

長田新編『原爆の子』は、一九五一年一〇月に岩波書店より刊行された。広島の子どもたちが書いた、原爆被害の実態を示す手記から成るこの書は、占領下で原爆関連の情報が規制されていたこともあつて人びとに大きな衝撃を与えた。

本発表では当時の政治的社会的状況を踏まえつつ、『原爆の子』の序文に出てくる「ユネスコ」（国際連合教育科学文化機関）の記述から本書の思想的位置について考察した。本書刊行の前月にはサンフランシスコ講和条約が調印されているが、これは西側陣営を中心とする国々との単独講和であり、日米安全保障条約とともに冷戦体制における日本の姿勢を表明したものであった。国内ではソ連や中国も含めた全面講和を求める声も大きく、『原爆の子』は日本の国際復帰とその位置取りが問題となっていた時期に刊行されていたのである。

この問題を「ユネスコ」という記号から見えていくならば、雑誌『世界』（岩波書店）に掲載された、ユネスコの社会学者たちによる声明「平

和のために社会科学者はかく訴える」（四八年一月）が重要だろう。東西対立を越えて結集した八人の学者によるこの声明を受けて、同誌に「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」（四九年二月）発表、その参加者を会員とする平和問題懇話会が結成されるなど、「ユネスコ」は「平和」をめぐる言説の中で反復・引用されたのである。もともとユネスコ憲章が「人の心の中に平和のとりでを」という理念を持つこともあり、談話会に集う学者たちや『世界』の読者たちにとつて「ユネスコ」は国際性を帯びつつもイデオロギー性を消去した「平和」を象徴する記号だったといえるのではないか。

だとすれば『原爆の子』序文の「ユネスコ」への言及もまた、その文脈で捉えられるだろう。ただこの点は長田新の思想とあわせて検証する必要がある。またこの時期に明るみになる原爆被害が、イデオロギー性を消去した平和運動や国際社会復帰をめぐる言説の中でどのように受容されたかについて、朝鮮戦争勃発に伴う平和運動への弾圧の強化と重ね合わせつつ考えねばならないだろう。発表を通して明らかになったこれらの課題について考えていきたい。

◇ 研究発表3

「原爆／原発小説」の修辞学

中野 和典

原爆も原発もそれぞれに当事者性がゆらいでいる現状において、それらを語る際の修辞の問題はより重要なものになっている。当事者の発言の特権性に期待できない以上、原爆や原発を語る言葉の強度は修辞に大きく左右されることになるはずだからである。では、原爆についての語りと原発についての語りは、どのように接続すれば（あるいは接続しなければ）よいのだろうか。それを考えるときに重要な手がかりとな

るのは、「原発小説」の中に見られる原爆表象であろう。原発事故は人間に何をもたらすのかという問題についての参照枠が乏しい中、それを題材にした小説はどのように原爆表象を取り入れているのだろうか。以上のような問題を念頭に置いて、今回の発表では原爆表象と原発表象の接点に注目することによって「原爆／原発小説」の修辞が持つ可能性を追究した。

具体的には、野坂昭如「乱離骨灰鬼胎草」（小説現代 一九八〇・四）、清水義範「放射能がいつばい」（『単位物語』朝日新聞社、一九九一・十一）、高橋源一郎『恋する原発』（講談社、二〇一一・一一）の三つを「原爆／原発小説」の例として取り上げて分析を行った。まず、野坂昭如「乱離骨灰鬼胎草」が軽い形式と重い内容の懸隔によって、原爆という過去と子供という未来の双方を切り捨ててより快適に生きようとしている現在の人間のありようを痛烈に批判していることを野坂昭如のエッセイ『右も左も蹴つとばせ！』（文藝春秋、一九八〇・二）などを参照しつつ論じた。次に、清水義範「放射能がいつばい」が『夢千代日記』のパロディを描くことによつて、その原爆表象としての現実性を問題化していることを原典との比較を行いつつ論じた。最後に、高橋源一郎『恋する原発』が安らかに眠らぬ被爆者の表象によつて現代の言語的な閉塞状況と対峙していることを「INTERVIEW 『恋する原発』（「群像」二〇一一・一）などを参照しつつ論じた。

◇ワークショップ「ヒバクシャを語る」―核と植民地主義―

マーシャル諸島米核実験被害の実態

―グローバルヒバクシャの射程から迫る―

竹峰 誠一郎

私は「グローバルヒバクシャ」を概念装置に、核被害を受けた人びとの存在を議論の中心に据え、マーシャル諸島の米核実験被害をめぐる地域実態調査に一貫して取り組んできた。その研究成果の一端を報告した。

「グローバルヒバクシャ」とは、「唯一の被爆国」の枠組みを超え、世界で核被害を訴える人びとの存在を視野に収め、甚大な環境汚染が地球規模で引き起こされてきた現実をくみ取るべく指定した、新たな概念装置である。さらに放射線被曝という共通項で、広島・長崎、さらには福島を含め世界の核被害の問題を結び、横断的に捉える視角を拓く概念装置でもある。

マーシャル諸島は中部太平洋に位置し、一九四六年から五八年にかけて六七回におよぶ米国の原水爆実験が繰り返された。一九五四年三月一日、第五福竜丸が被曝した水爆実験ブラボーも、マーシャル諸島で実施された核実験である。マーシャル諸島で住民と生活を共にし、聞き書きを進めるとともに、米公文書の収集に取り組み、ローカルとグローバルの両面からマーシャル諸島の米核実験被害問題に迫ってきた。

核被害とは何なのだろうか。健康に留まらない、生活・文化・心への被曝の影響の拡がりを紹介し、より包括的に核被害を捉えていく見方を提示した。個々の疾患は重要であるが、その点にのみ注目するならば、地域社会の生活基盤を破壊する核被害の広がりが見えられ、核被害が過小評価されかねない。

核被害者は誰なのか。米政府が設定したマーシャル諸島の核実験被害

の線引きを問い直し、先行調査のなかで実相解明の対象とされてこなかった「視野の外にある」アイルック環礁の核被害者の存在を浮き彫りにした。マーシャル諸島の米核実験被害像の見直しが求められている。

核被害の追求を続けつつ、被爆地の未来をどう拓いていくのか問題関心を持って研究を進めている。被曝を背負い、米原子力委員会による人体への被曝影響の追跡調査で、データ収集の対象にされるなか、ロングラップの人びとが、国境を越えたネットワークを築き、「ビイクタイム」から「サバイバーズ」へと、生き抜いてきた軌跡を紹介した。さらに住民側の抵抗が、米政府をも一定揺り動かし、政策変更をもたらしていたことを浮き彫りにした。マーシャル諸島の核実験被害者は、泣き寝入りし続けた弱者としてのみ捉えられる存在では決してないのである。

◇ワークショップ「ヒバクシャを語る」―核と植民地主義―

朝鮮人被爆者を「語る」

―韓水山『軍艦島』の場合―

楠田 剛士

韓水山の小説『軍艦島』は二〇〇九年に日本語訳が出版されたが、二〇〇三年に韓国で出版されたときは『カラス』という題名が付いていた。発表では、この「カラス」という語に注目し、その語が小説においてどのように用いられ、朝鮮人の強制連行、炭坑労働、原爆被爆の問題とどのように関係するのかについて考察した。

まず注目できるのは『放置された朝鮮人被爆者の死者を啄む鴉』という用法である。これは丸木位里・丸木俊の「原爆の凶」第十四部、さらに石牟礼道子の「菊とナガサキ」がもとになっているが、死後も継続する差別のありようが小説でも描かれている。また、死体に群がる鴉は『不吉なもの隣り合う』ものとして、日本の植民地政策や徴用に関する場

面でも登場する。《差別されている鴉から見下される朝鮮人》という差別の連鎖は、炭坑における朝鮮人と黒人捕虜の出会いの場面にも派生し、ここでは被差別者の差別意識が描かれている。さらに炭坑については、戦争の原料を掘り出す銃後の戦地であるとして、差別意識を生み出す戦争の問題へと関係付けられている。

このように鴉と朝鮮人は被差別の表象として別々に描かれるが、一方で炭坑で働く朝鮮人たちは《鴉のように黒い坑夫》であると形容されるように、両者のイメージの重なりも見られる。鴉の黒さについては「い



ワークショップ

くら鴉が黒いからって、中身までは黒くないぜ」(上・三四七頁)、「鴉は墨を塗ったから黒くなったんじゃないぜ、生まれつきだぜ」(下・一六一頁)とあるが、日本から支配される朝鮮人もまた「朝鮮人は朝鮮人さ。中身まで日本人になるはずがねえ」(下・二二八頁)、「世の中はすっかり日本のものになってしまったが、魂までは他人のものになるはずがない」(上・三三二頁)と語られるように、差別への抵抗のイメージとしても鴉は用いられている。

上映会・鼎談印象記1

野坂 昭雄

どんな映画でも大きく二つの見方ができる。一つは、小説でいえば物語内容に着目するもの。『リオ フクシマ』では、サミットに参加した福島の人々が原発事故の被害を訴える場面や、感情的ではなく科学的に放射能に向き合おうとする菅野さんの言動を通して描き出されるフクシマの問題だ。サミットでその被害を訴え損ねているというアイロニーを、この映画は映し出す。鼎談で高野吾朗さんが述べていたように、それは出来事を他者に伝える困難さに起因するものだろう。

加えて、岡村さんには力強く生きる人々へのまなざしが暖かい。『消えた炭鉱職者を追って』もそうだが、その映像にはブラジルの日本人移民をはじめとするマイノリティや弱者が描かれる。著書『忘れられない日本人移民』を読みつつ、私が思い浮かべたのは今村昌平である。エッセイ集『遙かなる日本人』には、「棄民」という章立てで「からゆきさん」や「未帰還兵」について触れられているが、それにとっても近い印象を岡村さんの映像と著書から受けた。

もう一つは物語言語、つまりドキュメンタリーの作り方に着目する観点である。鎌田慧の「視る」ことと「書く」こと(『図書』一九九九年一月)、この文章の存在はある大学の編入学試験問題で知った)という文章が私の印象に残っている。「視る」ことの意味を問うたそのエッセイで、カメラの向こう側の現実との「対話」ということを説明するのに、鎌田は映画『二十四時間の情事』冒頭の「私は視たヒロシマを」「いや、お前はなにも視ていない」という対話を持ち出す。「視る」ということは、対象に入り込むことでも、そこから距離を取ることもある。鎌田曰く、「デューラスは、自分にひきつけて視ない限り、なにも視えない、と主張している」。

現実の記録であるドキュメンタリーは、もちろん観る人によって受け取り方もさまざまである。岡村さんは「どのように視てもらってもかま

わかない」と言う。だが実際はそうではない。彼の映像は、観客に媚びた心地よい映像ばかりに慣れている私たちを良い意味で裏切ってくれる。聞き取りにくい音声、カメラマンが映り込んでしまった映像、通常はカットされてしまいそうな多くの場面等々に出くわして違和感を覚えたとしたら、それは取りも直さず私たちが自身が試されているということだ。

その製作において、岡村さんは多くの観客が「なにも見ていない」存在であるということ強く意識しているように見える。私たちは岡村さんの映像から、自身の世界の認識方法がいかに歪^{いびつ}であり、映像を自分にひきつけて見ていないかを知ることになる。その意味で、岡村さんは怖ろしい映像作家である。



鼎談



鼎談者の三氏

上映会・鼎談印象記 2

Pamela Ruiz

私は一九八六年にサンパウロで生まれた日系三世です。中学校時代に家族と一緒に日本へ来ました。現在神戸市外国語大学で勉強をしています。今回は所属ゼミの松永先生に誘っていただき、初めてアカデミックな研究会に参加することができました。政府の代表者ではない人々が、核実験や環境あるいは原発事故問題についてそれぞれ問題意識をもち、活発な意見が交換されているのを見て感銘を受けました。今回は私にとって関わりの深いブラジルを舞台とした岡村淳さんのドキュメンタリー映画について感想を述べたいと思います。

ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開かれた国連の環境サミットを舞台とした岡村さんの映画を鑑賞して、これまで見えていなかったことが見えるようになりました。特に私が驚いたことは、ブラジルが世界全体の環境問題に興味を持ち、ブラジル人が福島原発事故についても見識を持っていること、またブラジル人から「私は原発反対運動に参加していません」という声が聞けたことです。さらにブラジルでは、原発事故ではないものの、核廃棄物からの放射性物質による汚染事故が起きており、被害者たちが周りからの差別、政府からの無視、生活保護の欠如といった様々な問題を抱えていることが分かりました。

一方で、日本をでて海外で、自分の意見を一生懸命にブラジルの人々に伝えようとしている日本人もいました。「原発反対!」と大きな声で訴える女性は強い印象を残しました。けれども、言語や文化の壁もあり、何をどれだけ人々に伝えることができたのか、疑問が残りました。ポルトガル語でパンフレットやポスターを作ったり、通訳を連れて行ったり、もつと他にもアピールする方法はあったのではないかと思います。けれども、問題に対する「本物」の解決策を求めて、ブラジルにやってきた人もいました。その人は楽器を弾きながら注目を集め、その後、放射性物質の除染に効果

があるといわれるヴェチヴァーと呼ばれる植物を日本へ持って帰ることに決めました。自分の土地を変えようと思うのならば、自分の足で出て行って、解決策を探さなければならない、ということでしょう。

映画のなかでヴェチヴァーについて調べている研究者が、カメラに向かって「私たち研究者は政府からのサポートをもらっていない」と述べていました。岡村さんの映画はたいへん面白く、ブラジルの良い点をたくさんみせてくれました。けれども映画のなかで浮き彫りにされているブラジル政府側の無関心さには、落胆しました。政治家によるサポートがなければ、ブラジルは成長しない。けれども同時に、個人ができることについても考えるきっかけとなりました。私自身はいま何をしているのか、何ができるのか、そして世界の人々がもっと健康的な生活ができるための私の役割は何なのか、今回の研究会に参加をして考えさせられました。

彙報

第四二回 原爆文学研究会

【一日目】

○日時 二〇一三年八月三十一日(土) 一三時より

○会場 神戸市外国語大学 三木記念会館

○研究発表

発表1 ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』形成過程の考察

～編集者の役割を中心に～

発表2 「原爆の子」を読む

発表3 「原爆／原発小説」の修辞学^{レトリック}

【二日目】

○日時 二〇一三年九月一日(日) 一〇時より

○会場 神戸市外国語大学 三木記念会館

○ワークショップ ヒバクシャを「語る」―核と植民地主義―

マリーシャル諸島米核実験被害の実態

―グローバルヒバクシャの射程から迫る

朝鮮人被爆者を「語る」―韓水山『軍艦島』の場合

○記録映像作家・岡村淳ドキュメンタリー上映および鼎談

上映 「消えた炭鉱離職者を追って 序章」＋「リオ フクシマ」

鼎談 岡村 淳、高野 吾朗、川口 隆行

編集後記

研究発表三本、ワークショップ、ドキュメンタリー上映＋鼎談と、今回大変充実した研究会になりました。原稿をお寄せいただいたみなさまにお礼申し上げます。

今回二つのドキュメンタリーが上映されましたが、私は七月に福岡で始めて観て、今回で二回目でした(このときは「リオ フクシマ」が先に上映され、もうひとつの作品には「後・出ニッポン記 序章」というタイトルが付けられていました)。鼎談のときに岡村さんが「四回観て、観れば観るほどおもしろいと言ってくれる人がいる」とおっしゃっていました。私も二回目で新しく気づくことや、印象が変わることがありました。また、二回観てもやはり自分が同じシーンに躓いたり、笑ったりしていることにも気づき、一人の人間の中でも多様な受け取り方ができる映像の力について改めて考えました。

次回は十二月二十八日に福岡で、次々回は二〇一四年三月一日に北九州で開催です。(楠田剛士)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>